



鉄塔の天使

猫吉

長野駅といえば、今は姿を変えてしまったが、善光寺を模した駅舎が有名だった。観光客はそれを見ると、長野県ではなく信州に来たという気持ちにさせられる。

朝十時。佐田信二はあくびをしながら、特急電車から長野駅のホームに降り立った。

一緒に降りた人たちは、押し合いながら、善光寺に通じる西口の改札口へと消えていく。

佐田は階段を上り、西口とは反対側の東口へと向かった。通路には帽子を被った初老の男性が一人、重そうな買い物袋を持って歩いているだけだ。

改札を出た佐田は、肩にかけていたリュックを下ろし、その中から水色の作業服を取り出して引っ掛けた。

名古屋の測量会社に勤めている佐田は、三十二歳で、色白の小柄な男だ。日に焼けていないのは、現場に出るよりも内業と呼ばれる図面を書く仕事が多いからだ。

これから元請け会社の社員と二人して、現場に行くことになっている。そのために朝一番の電車で、名古屋から出て来たのである。

佐田の表情は暗い。

仕事先の間と初対面というだけでも、気が乗らないのに、彼の良くない噂がいつそう気分を重くする。

座右の銘が『他人の不幸は蜜の味』だと公言するような人なのだ。どんな人物か想像がつくというものだ。

朝の五時から、担当者の自宅に苦情の電話をしてきたとか、気に入らない人間にはとことん意地の悪いことをする。などと本当かどうかはわからないのだが、様々な話が入ってくるのである。

相当な変人で、つき合いにくい人物だということは確かなようだった。

佐田は改札口から広場に出ると、落ち着かない様子であたりを見渡した。

十月に入ったばかりなのだが、ほほに当る風が冷たい。冬になったらどれほど寒いだろうか、想像出来るような冷たさだった。

広場の正面には三軒ほどの商店が寄り添うように建っている。左側には十台分ほどの駐車場。目立つ建物は変電所の鉄塔くらいだ。

観光地の表舞台である西口にくらべて、東口は同じ駅とは思えないほど寂れている。

駐車場にエンジンをかけた、ライトバンが一台止まっていた。その車には、見るほうが恥ずかしくなるほど目立つ字で企業名が書いてある。

佐田はその車に近づくと、運転席の窓を軽く叩いた。

車の中には、年季の入った作業服を着た男が一人座っている。歳は四十代前半、現場の間人らしく、日に焼けて、精悍な顔をしている。

男は合図に気がつくと、佐田の方に顔を向け、左手で助手席を指差した。

挨拶を交わしながら、リュックを後ろの荷台に置くと、助手席に座り、シートベルトを締める

。 運転席の男性は、下沢哲男。皆からは「シモちゃん」と呼ばれ、会社の中では仕事は出来るが、協調性のない変人と見られている。

下沢は座っているとわからないが、身長は百八十五センチ、手足も長く、痩せている。

身長にふさわしい体重があれば、偉丈夫に見えるのだが、今のままだとバランスが悪く、不安定な感じがする。そんな所も、変わり者扱いされる一因となっているのかもしれない。

佐田はさりげなく下沢の表情をうかがった。

運転に集中しているのか、表情には何も浮かんでいない。それでも、機嫌が悪いようには見えなかった。

佐田は黙っていることにした。相手がどんな人間なのかわかるまでは、そのほうが得策だろうと考えたからだ。

これから行く現場は、長野市から少し離れた上田市にあった。

千曲川の狭い堤防道を、下沢は慣れた様子でスピードを上げ、車を走らせている。

下沢はチラリと佐田の方を見てから、口を開いた。

「なんだか緊張しているようだが、大丈夫だ。俺は運転はうまいからな。なにしろ仕事で毎日運転しているけど、これでもゴールド免許なんだぜ」

「本当ですか、それは凄いですね」

佐田は感心してそう言った。お世辞ではなく、本当にそう思った。毎日運転していて、何年も無事故・無違反で過ごせるのは、なかなか出来ることではない。

それと、下沢が緊張している理由を自分の乱暴な運転だと勘違いしてくれたことで、佐田は気が楽になった。

緊張がゆるんで、口が軽くなった。

「そういえば、最近上田市でU F Oが出たらしいですね」

佐田は言ってから、しまったと思った。先日友人からそんな話を聞いて、つい口に出してしまったのである。

「U F O？ 知らないなあ。それにしてもおまえもちょっと変わっているな。そういう俺も世間からは、変わり者とか言われているけどさ」

バカにしているというよりも、親しみのこもったような口調だった。

どうやら同類と思われたらしい。それはちょっと心外ではあるが、噂とは違って、それほど悪い人ではないと思うと、佐田はほっとした。

仕事というのは、役所に出す申請図面の作成だった。当時は、長野新幹線の開通前で、新設線路の邪魔になる電線類を撤去して、地中に埋め込む作業が行われていたのである。

そのため、申請書類に添付するための平面図を測量することになったのだ。

測量といっても精度が必要なものでもなく、既存の古い平面図を使って、足りないところを補う程度の物である。

佐田はこうした事には慣れているので、巻尺とコンベックスと呼ばれるメジャーがあれば、それらしいものを作ることが出来る。

要するに、必要ない所は簡単に、重要なところだけ正確に計ればいいのだ。

要領が悪いと、時間が掛かった割にごちゃごちゃしたものが出来上がる。それは、なんでもかんでも書き込むからであり、ポイントがつかめていないからだ。

下沢は二人で測る時だけ、協力してくれるが、それ以外は佐田にまかせたというように、ぼんやりと辺りの風景を眺めている。

佐田は作業をしながら、下沢が現場を良く理解しているし、現場に携わる人間の気持ちも分かっているなと感じた。

細かいところは相手にまかせて、肝心の所だけ指示する――いかにも手慣れたふうであった。

さらに三カ所、二人で測量をした。

仕事が終わった頃には、昼休みを過ぎていた。

昼はどうするのだろうと思いながら佐田は、下沢の横顔をのぞき見たが、表情からは何も読み取れない。

下沢は国道沿いにある平凡なラーメン屋を見つけると、駐車場に車を駐めた。付いてこいというように店に入った。

佐田は頼んだ塩ラーメンをスープまで飲みほした。

特にうまいというわけではないのだが、久しぶりに現場で体を動かして、お腹がすいていたからである。

下沢は漫画雑誌を片手に、味噌ラーメンを食べていたが、ただ腹の中に食べ物を入れているだけのように見えた。

料理を作った人間からすれば、作りがいのない客に思えただろう。

下沢は店を出ると、佐田の方に秘密めいた笑いを浮かべて話しかけた。

「ちょっと、面白い店があるんだが、寄っていくか？」

「いいですね。どんな店なんです？」

「まあ、それは行ってみればわかるさ」

そう言うと、下沢は来たときよりも足を速めて歩き出した。

下沢の後を追いながら佐田は、どんなところに連れて行かれるのか、不安になったが、どっちにしても、自分に断る自由があるはずもない、とため息をついた。

その店は、国道沿いにあった。

何の特徴もない民家にはさまれるように建っていた。その裏には稲刈りされた水田が広がっている。

車を店の前に駐め、佐田たちは車から降りた。空き地に敷かれた砂利が、作業靴に踏みつけられ、耳障りな音を立てる。

埃っぽいガラス戸を開けて中に入ると、照明が点いていないのか薄暗い。店内には、椅子に腰掛けた中年女性が、大型テレビを見ているだけだ。

彼女は来客に気が付いたらしく、二人の方を振り向くと、精一杯の笑いを浮かべた。

「どうぞ、ごゆっくり見ていってください、いま電気をつけますから」

小太りの中年女性はそう言うと、椅子から立ち上がって、部屋の隅に歩いていく。

作物の出来を見回る農婦のような、ゆっくりとした足取りだった。

しばらくすると、店の中が急に明るくなった。彼女は重労働し終えた作業員のように、自分で肩を揉みながら、ついさっき座っていたパイプ椅子に戻っていった。

この店は、客が来たら照明をつけるシステムになっているようだ。

店はリサイクルショップだった。ありとあらゆる家電品・パソコン・がらくたが、秩序なく部屋の中に詰め込まれている。店舗というよりは工場の倉庫のようだ。

佐田は下沢と離れると、棚に並べられた古いパソコンを物色した。

フリーマーケットで掘り出し物を探し出す時の、わくわくする気持ちが体にみなぎってくる。

仕事で来ているので、買う気はないのだが、パソコンや得体の知れない器械を見ているだけで楽しい。

一通り商品を見た佐田は、下沢の様子が気になり、探してみた。

下沢は奥の部屋にいた。壁際に置かれたスピーカーの前で腕組みをしている。

学校の講堂などに置いてある巨大なスピーカーだ。片方だけでも一万二千円の値札がついている。

脳内でスピーカーから流れ出す重厚な音楽が再生されている――そんな錯覚をするほど、下沢はスピーカーに魅惑されているようだった。

下沢は数分後、夢から醒めたというように首を振ってから、佐田に話しかけた。

「また、こんなものを買って帰ったら、女房になんていわれることやら。あきらめるか……」

あまりにでかすぎて、会社のライトバンに乗らないだろう。まったく、何を考えているのだろうか。佐田は、下沢のいかにも残念といった横顔を見ながら思った。

下沢は、そうは言ったものの、まだ諦めきれないようだった。

「値段があと二千円安くなったら買うのにな。ライトバンだって、後ろのシートを倒せば、乗るかもしれないし……」

自分を納得させる言い訳のように呟いた。

そうして下沢は、店員の所に歩いていくと、値段の交渉をはじめた。

「うちの社長じゃないと、値段のことは分からないから」と、彼女はしぶい表情をする。

このオバサンはみかけによらずに、結構商売上手なのかもしれない、と佐田は思った。

「とにかく、社長に連絡してみますから……」という店員の言葉に、下沢は「しょうがないな」と不満げに言った。

彼女は、社長に電話をするために受話器を取り上げた。

「もし、もし……」という声が聞こえてくるが、それ以上の会話がな。どうやら電話がつながらないようだ。受話器を握ってオロオロしている。配線を調べたり、受話器を叩いたりするが、駄目なようだ。

見かねたように下沢は、店員に近づくと、電話の配線をたどりはじめた。

腰をかがめたり、壁際の高いところまで身体を伸ばしたりして配線を確認している。その姿は電話工事の人間のようだ。

複雑に絡み合った線をより分け、コネクタに接続してから、店員に「これで良いと思うから、電話をしてくれるか」と言った。

店員が試すと、今度はつながった。

下沢は、得意満面の様子でそれを見ている。

電話を終えた店員は「すみませんでしたねえ……」と恐縮したように答えた。

しばらくすると、店員は外に出て行って、すぐに戻ってきた。手には缶コーヒーが二本握られている。それを二人に差し出した。

下沢はそれを飲みながら、佐田にこっそりと「これは何か買わないと帰れないな」と耳打ちした。

店員は「社長と連絡がついて、十分後には、戻ると言ってましたので」と下沢に報告した。

佐田達はそれまで、待つことにして、がらくたを再び物色し始める。

そうするうちに、社長が帰って来た。

小柄で気弱そうな中年男性だった。店員と話をする態度からは、夫婦のような親密さを感じられる。

下沢が交渉をはじめると、社長は「これは、仕入れに失敗しちゃってねえ」と暗い表情で言った。

「両方で二万円ぐらいならねえ」とさらに続ける。

結局、下沢の気迫に負けたのか一万六千円ということで、手を打つことになった。

社長は、かわいそうぐらいにしょげかえって、「これは、仕入れに失敗しちゃったからねえ」と同じ愚痴をこぼした。

すがりつくような社長の視線を無視して、下沢は財布から紙幣を取り出すと、社長の手のひらに一枚ずつ乗せていく。

佐田と下沢は二人して、大きなスピーカーをライトバンの傍まで運んだ。

下沢は後部座席を倒してから、雑多に置いてある書類や工具を入れた段ボール箱を片付け始めた。といっても整理整頓するわけではなく、スピーカーを置く隙間を作るための作業である。

後部座席に押し込んだスピーカーのせいで、うしろはまるで見えない状態になった。さらに、邪魔になった小物類が佐田の足下や座席の横に置かれていく。

下沢は鼻歌まじりで、運転している。

佐田に指示をして、車についているカセットデッキの電源を入れさせると、六十年代のポップスが流れ出した。

佐田も知っている懐かしい音楽だ。アニマルズの「朝日の当たる家」の切ない歌声を聴いていると、深夜放送を聴いていた学生時代を思い出した。

「懐かしいですね」

佐田の言葉に、下沢は「そうだろ、今の音楽よりもよっぽどいいよな」と返事をした。

「それにしても、カセットデッキが付いている社有車というのも珍しいですね」

佐田は先ほどから気になっていたのだ。個人の車ならカセットデッキくらい付いていても当た

り前だが、会社の車でこんなものが付属しているのは初めてだった。

「それは俺の車だけなんだ。といっても勝手に付けているだけなんだけどな。女房の親戚が板金屋をやっているからさ。適当に合いそうなものをくっつけたんだ」

カセットの音楽はステッペンウルフの「ワイルドでいこう！」に変わった。

下沢はサビの部分で熱唱し始めた。そのせいか、心持ち速度が上がる。

車は砂利道に入ってもそのままのスピードで走り続ける。後の座席からスピーカーがガタガタと揺れ動く音がした。それがちょうど伴奏のように聞こえてくる。

佐田は下沢の歌声を聞きながら、やっぱり変な人だったなと思った。

会社に帰ると、下沢は車を駐車場に駐めた。場所が決まっているのかちょうど一台分が空いている。

佐田は仕事の資料を両手に持って、車を降りた。

後部座席を占領しているスピーカーが目に入る。こんなことでいいのかなと思いながら、下沢の方に視線を向けた。

下沢は先ほどの楽しそうな表情が消えて、最初に会った時の無表情に戻っていた。

元請け会社の工事課は、長野支店とは別の棟にある。プレハブで建てられていて、その安っぽさが会社での立場を象徴しているようだった。

入り口に近づくと、中から笑い声が聞こえてくる。三時すぎのおやつでも食べているのだろう。

工事課のドアを開けて、室内に入ると、急に静まり返る。

今までのゆるんでいた空気が張り詰めたものへと変わった。

下沢は気にするふうでもなく、自分の席に歩いて行く。

佐田はぺこぺこ頭を下げながら、下沢の後に付いていった。まわりから好奇の目が注がれているのを感じる。

下沢は席につくと、佐田に向かって、あごを部屋の奥に突き出した。

その方向には課長の席がある。

佐田は課長の席に駆け寄ると、挨拶をした。

課長は、五十過ぎの小太りした男だ。酒好きらしく鼻の頭が赤黒くなっている。あと数年もすれば、定年だろう。それまでは何事もなく無事に過ごしたいと考えているタイプに見える。

「シモちゃんから聞いているよ。とにかくいろいろと忙しいんで、ひとつよろしく頼むよ」

課長は言うてから、それ以上の話はないというように、目の前にある書類を手を取った。

佐田は下沢の隣に座ると、今日の現場のまとめを始めた。

下沢が用事で事務所から出ていくと、何かから解放されたというように、そこかしこで無駄話が始まる。

佐田の正面に座っている三十代の男が、腰を伸ばすと、佐田に話しかけてきた。

「おめさん、名古屋から来たんだら」

佐田は「そうです」と愛想笑いを浮かべて返事をした。

「シモちゃんと一緒にだと疲れるだろ？ ふんとに細かいこと言うからな」

佐田はどう言っているのか、少し困った。下沢の悪口や変わったエピソードでも紹介すれば、男の気に入るだろうとは想像がつくのだが、それをためらう気持ちもある。

「そんなことはなかったですよ。仕事も手伝ってくれましたしね」

佐田の言葉に、男は不満そうな表情をすると、凶面を広げて仕事に戻った。

次の日、佐田はビジネスホテルを引き上げ、就業時間の十分前に元請け会社に入った。

下沢はすでに来ていて、ワープロをのぞき込んでいる。

課全員で朝の準備体操をしてから、すぐに佐田と下沢は車に乗り込んで、現場に出かけた。

午前中に現場を済ませて、午後から佐田は名古屋に帰る予定である。

「ところで、あのスピーカーはどうになりました。奥さんにばれて怒られたのでは……」

佐田はそう言って、話題を振った。

「わからないように車から降りしておいて、物置の戸を開け閉めしてから、部屋に持っていったさ。そうして、今物置から出して来ましたという演技をしたら、何も言わなかったな。女なんてバカなもんだぜ」

と、笑いながら下沢は言った。

奥さんがバカなのではなくて、呆れて何も言わなかっただけではないのか、と佐田は思ったが、黙っていた。

仕事を終え、残りの作業は名古屋でやることにして、佐田は午後三時の特急で帰ることになった。

下沢は車で佐田を駅まで送ってくれるという。意外と親切なところがある。

「もともと俺は中途入社だからな。転勤で来たここが気に入って、いまじゃ家も建てて、こっちの人間のつもりなんだが、会社は本社に戻ってこいってうるさいんだ」

車内で急に身の上話をはじめた下沢に、佐田は戸惑った。そうした話をしないタイプだと思っていたからである。

しばらくしてから、愚痴を言う相手がいないのだろうなと思い直した。下請け業者ならば愚痴をこぼす相手としては最適だ。

身の上話を続ける下沢の横顔が寂しげに見える。噂ほど変な人ではないようだな、と佐田は思った。

下沢は佐田が気に入ったのか、その後も、何度か仕事をまわしてくれた。

ある日、下沢から佐田に電話があった。

研修があって、名古屋に行くから、本社で仕事の打ち合わせをしようというのである。

元請けの本社は中区にある古ぼけたビルで、ほとんどの部署は郊外に引っ越している。

今でも中区に置いておくのは、名古屋では中区に本社があるとないとは信用がまるで違うからだ。

打ち合わせが順調に終わったので、佐田は二階にある喫茶コーナーに下沢を誘った。

佐田は自販機からコーヒーを二人分買ってテーブルに置いた。

中途半端な時間なのか、他にはだれもいない。佐田は周りを見渡してから、話を切り出した。「下沢さん、副長になったそうですね。おめでとうございます」

下沢は一瞬照れたような表情をすると、皮肉な口調で話を始めた。

「主任から副長になっても、ちょっと査定ポイントが上がるだけで、その分責任が重くなるから、あんまり意味はないんだな。それよりも、どうして俺みたいなのが、副長になれたのか、知っているか？ それは、俺がいつまでも主任にとどまっていると、他の連中がそれ以上、上に行けないからさ。ほれ、女兄弟で長女がいつまでも嫁に行かないと、妹達が結婚しにくいというやつがあるだろ。それと同じさ」

同じ課の中には主任クラスが何人もいる。その中で下沢が一番年長だ。それに三十過ぎても何も肩書きがない人間さえいる。

下沢で頭が支えている状態で、後輩の不満がたまっていたのかもしれない。

肩書きが上がったのだから、もっと素直に喜ばばいいのに、と佐田は思った。そんな皮肉な見方をすると、下沢らしいともいえるのだが。

それでもやっぱり、出世したのがうれしかったのか、下沢は身を乗り出して話し始めた。

「今でこそ穴を掘るような土木仕事をしているが、昔は鉄塔に登っていたんだ。あの頃は無茶な事をやってな。安全帯もつけなくて作業をして上から怒られたものさ」

数十メートルもある鉄塔に登り、体一つで作業するのは、普通の人間には出来ないであろう。それに電気が生きていれば、下手をしたら感電死もある危険な作業だ。

「すごいですね、歩道橋から下を見るのも怖いと思う私には、とても出来ませんよ」

そう言った佐田を、バカにしたように笑った下沢は、話を続ける。

「実は俺も一回大失敗をしてな。鉄塔から真っ逆さまに落ちたことがあるんだ。気がついたら真っ青な空が見えて、ああ俺はこれから天国に行くんだなと思ったんだ。意識だけはあるんだが、体は動かない。きっとこのまま体がふわふわと浮いて行って、あの世とやらに連れて行かれるんだろうなんてな。そうしたら、遠くの方から俺を呼ぶ声がするんだ。だんだんと声が大きくなって、仲間の顔が俺をのぞき込んでいるのが見えて……気がついたらベッドに寝ていたんだな」

「そんな所から落ちてよく無事でしたね」

佐田は驚いたように言うと、下沢の体に目を注いだ。大事故にあったようにはとても見えなかった。

「そうだろ、みんなも不思議がったよ。おまえは悪運が強いなってさ。普通なら死んでいるはずなのに。体中骨折していたとはいえ、二ヶ月で退院したんだから、奇跡だよな」

下沢はそう言って笑った。

そうして、佐田の反応を確かめるように間を置くと、体を佐田の方に近づけ、今度は声を絞り、秘密めいたようにして話を続けた。

信じてもらえないだろうから、誰にも言わなかったんだが、あの事故の時に、落ちていく間誰かが俺を抱き支えるような感じがあったんだ。そう、天使か何かのふんわりと包まれるような、

それは子供が母親に抱かれるような安心感だった。

それからさ、俺は天使に守られているという確信が湧いてきてな。上司が煩いから安全帯を付けていたけど、このまま鉄塔から飛び降りたって、無事に済むような気がしたものさ。あの頃だったら、鉄塔の上でトンボを切ったり出来たと思うぞ。なにしろ恐怖心というのが一切なかったんだから。

で、ある日、本当にこのまま鉄塔から落ちたらどうなるだろうか、と思ったわけ。また天使に助けてもらえるかな——そんな事を実際に試してみたくなかったのさ。

要するに俺が天使に守られているという実証が欲しくなったんだな。そこで仕事を終えて、鉄塔から降りようと言う時に、安全帯を外して、そのまま飛び降りようとしたんだ。

すぐそばで、ザワザワと羽根の音が聞こえてくるようだった。

足に力を込め、飛び降りる瞬間、ふと思ったんだ。

ひょっとして天使がいるにしても、きまぐれで助けただけで、いつでも前と同じようにしてくれるとは限らないのでは——とな。

そうしたら急に足が震えてきた。鉄塔を巨大な手が揺さぶっているようだった。

あわてて手近な鉄骨にしがみついた。自分でもみっともないと思うほどあわてふためいている。

おそろおそろ腕を伸ばして、安全帯を引き寄せ、体に装着した。これで一安心と思って胸をなで下ろしたとたん。今度は別の恐怖が襲ってきた。

立っている鉄骨がぐにゃりと溶けて、足下から墜ちていく、そんな気がしてしょうがない。硬い鉄が薄いウエハースで出来ているようで、頼りなく思えてくるんだ。

安全靴で鉄板を踏みつけていても、頭の中では、鋼鉄で出来ている物が、溶けたりするはずはない、と分かっている、心の中ではそうは思えない。

十年以上も鉄塔の上で仕事をしているはずなのに、こんな気分になったのは初めてだった。まるで、初めて鉄塔に登ったひよっこになったようだった。

そんなわけで、地面にたどり着くまでにずいぶんと時間が掛かった。

土を踏んだ時のうれしかったこと。何度も地面を靴で踏みつけたものさ。

で、俺は高所恐怖症になったと気がついた。すぐに課長に配置転換を頼み込んだ。

水が怖い水泳選手、スピードが怖いレーサーのように、高所恐怖症の鉄塔マンなんて、何の役にも立ちゃしない、そうだろ……。

ということで、今では地上に降りて、地面を掘るような仕事をしているというわけさ。

下沢は、長い話を語り終えると、床板の強度を確かめるように、足で床を軽く蹴った。

初雪が降り出してきてもおかしくない季節になっていた。襟にボアのついた防寒ジャンパーを着込んでも、どこからか寒さがしのびこんでくるようだ。

佐田の隣で運転しているのは、元請けの宮川という男だ。人の良いのが取り柄だけの初老の男性で、現場監督としてはあまり有能とはいえない。

彼の受け持っていた工事現場が終わり、請負先に提出する完工図書を作成するために、佐田と二人して現場を調査した帰りだった。

狭い山道を慎重な運転で降りると、視界の開けた盆地に出る。

彼は舗装された農道に入ると、スピードを上げた。横顔には仕事を終えた開放感が浮かんでいる。家で飲む酒の事でも考えているのだろう。

午後四時過ぎだというのに、あたりはもうすぐ夕暮れを迎えようとしている。稲を刈り込んだ水田が寒々しい。

「おっ、シモちゃんがいるな。まったく、自分で重機を運転しないで、下請けに任せればいいら。変なところでずくを出すからな」

宮川の視線をたどると、小高く土砂が積まれた場所で重機が動いている。

運転席で器用に操縦している男の姿が、逆光で影絵のように浮かび上がって見えた。

その姿は、大きなオモチャで遊ぶ大人のようなようだった。

下沢が間に合わない作業員に業を煮やして、自分でやったほうがましとばかりに運転しているのだろう。

本来現場監督というのは、現場を監督するのが本業で、自ら作業に手を出してはいけないものなのである。

そんなことを下沢に言ったら「馬鹿野郎、そんな事を言っていて作業が進むかよ」と怒るに違いない。

重機の先に付いたショベルが上げ下ろしされる光景を見ていた佐田は、羽根の折れた鳥がもがいているようだ――とそんな事を思った。

完

鉄塔の天使

<http://p.booklog.jp/book/41980>

著者：猫吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiti2001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41980>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41980>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.